

# 「機械化された思考」の暴力性に対抗する「創造的思考」の口承性

—ハロルド・A・イニス著『メディアの文明史』を読む—

Contrasting the Orality of ‘Creative Thought’ with the Potential Violence of ‘Mechanized Thought’:  
Reading *The Bias of Communication* by Harold A. Innis

中西 満貴典

NAKANISHI Mikinori

## Abstract

We cannot deny that we have the tendency to get into mechanized thought, a particular way of thinking in spite of trying to think freely. In this paper, we discuss the dichotomy of ‘place / space’ presented by Michel de Certeau. Here, the focus is on media and communication studies, especially referring to Harold A. Innis and Marshall McLuhan. We propose a hypothesis that ‘literacy’ is profoundly intertwined with the concept of ‘place’ which is constructed of well-ordered knowledge and information, but eventually produces the power to dominate our way of thinking by making our knowledge rigid. We attempt to demonstrate the relation between ‘orality and time’ and explore the possibility of deconstructing the potential violence of ‘mechanized thought’.

Keywords: H・A・イニス、M・マクルーハン、M・セルトー、「声／文字」、「機械化された思考・知識」

### 問題の所在と方法

現在、多くの人びとは、インターネットや携帯電話（含スマートフォン）、さらにはタブレット端末などを日常的に使用する社会生活をおくっている。情報収集の便利さや情報伝達のしやすさなどの面で、その恩恵ははかりしれないほど大きい。また、ソーシャル・ネットワーク・サービスなどを利用した、ネット上での情報や感情の交換（ときには反発）の場は、ヴァーチャル空間というよりもむしろ、巨大なリアリティを形成しているかのような様相を示している。われわれは、まさに新しいメディア環境によって取り囲まれているといえる。しかし、そのなかで、われわれが、ものを考えたり、思考内容を表現したりするという、きわめて人間的なものとみえが以前とくらべて向上したといえるのか、という問題も同時に考えてみる必要がある。

われわれの研究は、メディアの物質的形態が変わると、伝達されているテキストの意味は変容する、という前提に立っている。まさに、マクルーハンの言うところの「メディアはメッセージである<sup>1</sup>」といったところだ。たとえば、紙の本では、それが新刊本のハードカバーの装丁によるものなのか、あるいは文庫本のかたちとしてわれわれのまえに立ちあらわれるのかによって、読み手のテキストの意味のとり方が変わってくるだろう。近年、電子ブックが流通し始め、電子メディアで著わされたテキストも登場している。また、音声による伝達にしても、それが直接的な対面であるのか、電話によるものかによっても、

伝わる意味が変わってくるであろうことも同様にいえる。このように、われわれが提示する事柄の意味や、それを受けとるさいの意味が、メディア環境によって変わってくることは日常に実感されていることである。インターネットなどの新しいメディアのなかにいる現在において、われわれの思考や表現のしかたを、反省的にとらえることの重要性を指摘することができよう。

印刷術や書物が、人間の精神や、ものごとの認識のしかたにおよぼす影響について、いくつかの論者がすでに提出されている<sup>2</sup>。このような成果をまねにして、先行研究の成果をたんに掘りおこすのではなく、現代のメディア環境で進行している状況について検討するうえで、それらの知見をクリティカルに参照することは意義あることであろう。われわれの思考は、みずからの意志で自由におこなわれているのではなく、なにか大きな言説や物語によって、さらには、信念や偏見によってうごかされている、という想定をしている。行為としての思考には、「思考をする」という労力の発生がともなう。人間は放っておかれると楽なほうへ傾く。「反省」という努力のともなう思考ではなく、出来合いの型にはまった思考に依存するエコノミーがはたらく、と考える。そこで本稿では、一見したところ、ことなる二つのジャンルに属する図式をむすびあわせることによって、この問題の検討をおこなっていく。具体的には、ミシェル・ド・セルトーが分節した、「場所／時間」の図式と、コミュニケーション

ョン・メディア論などによって提示される、「文字の文化／声の文化」の図式とをむすびつけてみる。このように、二つの領域を接触させることによって、われわれが普段おこなっている、思考の様式を反省的に検討する手がかりを模索する。われわれは、つねに、「文字」や「声」（あるいは身体）といったメディアをつうじて思考したり、表現したりしているからである。

小論では、制度的な知を配置した秩序的かつ戦略的な「場所」概念と、それと対立する「時間」的な概念を、検討のための基本図式（場所／時間）として提示する。「合理的な」秩序なるものとして「場所」概念をすえて、それにたいして、実践的な動態を「時間」的な空間としてとらえた、ミシェル・ド・セルトーの図式において、いかにメトニミー（換喩）がはたらきうるかを論じた報告（中西、2014）のあと、あらたにつきのような視座をもうけた。それは、人間の精神活動やコミュニケーション行為の媒体にかんすることに目を転じる視点である。そこで力学が、セルトーの機構といかにむすびつくのかを検討課題とした。つまり、セルトーによる分節「場所／時間」を、伝達行為が、「文字」によるものなのか、それとも「声」によるものなのかの区分けから吟味する視角である。図式的に示すならば、「場所／時間」＝「文字／声」の等式の妥当性を検討することといえよう。論考すべき事項は二つある。ひとつは、「場所」と「文字の文化」との親和性をあきらかにすることである。そして、もうひとつは、「時間」と「声の文化」の相同性を論じることである。本稿では、このように一見したところ、はなれたところにあるようにみえる、二つの位相（「場所／時間」および「文字／声」）のむすびつきを論じることとする。

まずセルトーの図式なるものを素描する。セルトーのいう「場所」は、固定的・権威的な属性を有する次元の概念である。それにたいして、「時間」は、端的にいえば、「実践された場所」であり、流動性・創造性を有した次元概念である。時間性の点からいえば、「場所」は非時間的であり、当然のことながら、「時間」は時間的である。さらには、前者を静的、後者を動的なものとして性格づけることもできる<sup>3</sup>。小論では、それぞれ異なった位相に属するかのようにみえる、静的な「場所」概念と「文字の文化」とむすびつけ、また他方では、動的な「時間」概念と「声の文化」をつないでみようとするものである。それは、静的でありながらも、ものごとを秩序立てるモメントをはらむ「場所」概念と、「文字の文化」（リテラシー）が支配する社会における力動性との親和性を議論するものである。そして、時間の関数を含む「時間」のもつモメントと、「声の文化」（オラリティ）が支配するコミュニケーションの力動性との親近性を論じることである。

参照すべき論理・仮説は、ハロルド・A・イニス（1894-1952）著『メディアの文明史』（1987＝*The Bias of Communication*（1951））のなかから掘りおこしていく。イニスがあつかうメディアは、

おもに「文字」にかかるものであり、粘土板や尖筆、楔形文字の時代、ギリシア＝ローマ期にいたるパピルスや毛筆の時代、十世紀、暗黒時代にいたる羊皮紙とペンの時代<sup>4</sup>、そして印刷術の発明による紙の時代、宗教改革からフランス革命までの紙と手動式印刷機の時代について調べられる。さらに時代を飛びこえて、二十世紀初頭からのラジオの時代（「機械による二次的な声の時代」）、そして映画やテレビの時代のそれぞれにおける、新しいメディアの登場によって、古いメディアの衰退（それとともに、メディアによってまさに媒介された、ある特定の実体社会の衰退）の力学の描出をおこなっている。イニスは、コミュニケーションをになう媒体（メディア）における根源的な変容が、西洋のこれまでのいくつかの文明の盛衰に決定的な影響をおよぼしてきたことを示す。独占＝循環史観によるイニスのコミュニケーション・メディア史は、マーシャル・マクルーハンが『グーテンベルクの銀河系』（1986）を書くうえで、多くを負っている。そこで本稿では、イニスの論考（含マクルーハンによる「序文」）を、セルトーの「場所／時間」概念を吟味するための道しるべとした。

#### 「場所」＝「文字」（「機械化された知識」）

セルトーのいう「場所」概念の領域は、すぐれてリテラシー（「文字の文化」）の特性をおびたものである、とみる。ここでいう「場所」とは、「支配的政治・経済体制や支配的文化の形式、適正な言語体系」がなす空間のことである。その属性は、固定的・権威的・非時間的なものである。端的にいえば、「すべてのポジションが一挙にあたえられているような布置<sup>5</sup>」のことである。セルトーは、「場所」で作動するモメントを「戦略」とよんでいる<sup>6</sup>。そのような「戦略」概念とあわせて、「場所」なる次元について検討をおこなってみたい。

セルトーが提出する「戦略」概念は、つぎのように説明される。「わたしが『戦略』とよぶのは、意志と権力の主体（所有者、企業、都市、学術制度など）が周囲の『環境』から身をひきはなし、独立を保ってはじめて可能になるような力関係の計算のこと<sup>7</sup>」である。また、こうした戦略は、「おのれに固有のものとして境界線をひけるような一定の場所を前提としており、それゆえ、はっきり敵とわかっているもの（競争相手、敵方、客、研究の『目標』ないし『対象』）にたいするさまざまな関係を管理できるような場所を前提にしている。政治的、経済的、科学的な合理性というのは、このような戦略モデルのうえに成りたっている<sup>8</sup>」のである。引用文の「意志と権力の主体」として、所有者、企業、都市、学術制度があげられている。ここでは、学術制度について、イニスの所論に照らして検討をおこなう。イニスは、「批判的検討」（『メディアの文明史』295-304頁所収）において、大学人がとるべき反省的視点についてつぎのように述べている（302頁）。

われわれは、機械化された知識が力の源泉としての意義をもつことを、しかもそれが国家の道具を介してする力の要求に服従していることを認めざるをえない。大学は軍事力の一分科となる危険にさらされている。イギリス連邦の大学は機械化された知識の含蓄を正しく評価しなければならず、そして西洋文明のなかでの文化の位置を無視したことによって生み出された諸問題に対し、断固としてこれを攻撃しなければならない。政治組織上の利益のために教育のなかで中央集権化がおこなわれることは悲惨な含みをもつ。

この言述は、1948年、イギリス連邦大学会議に提出された論文にもとづく<sup>9</sup>。二十一世紀のいまを生きるわれわれは、このようなイニスの忠言を、真剣に検討することの意義を強調しなければならない。大学のあり方にたいする、あるいは学問のあり方にたいする危機感が、八百年におよぶ伝統をもつ西洋の大学においてできえ（あるいは「西洋の大学においてこそ」）、いまから半世紀まえに、すでにさげばれていたことの趣旨をあらためて検討する必要があるだろう。われわれは、イニスのこの警鐘のキーフレーズは、「機械化された知識」とみる。そのような「知識」は反省のない知識であり、暴力性をはらむ知識でもあることの指摘である<sup>10</sup>。人間は、思考（様式）をほうっておくと、その思考はワンパターン化し、結果的には、思考をしているようで思考をしていないという状況にいたる。「機械化された知識」は、ある特定の目的のための（たとえば、人びとを支配するための）すぐれた装置にもなりうる。政治組織上の利益のために、そのような知識は無批判に権力に奉仕しかねない。西洋文明のパラダイムにおいて、文化の位置についての反省、つまり、みずからが生みだし、それを科学というかたちで体系化している知識そのものへの哲学的な反省がなければ、大学という組織が「軍事力の一分科」にさえなりかねない、との指摘である。第二次大戦後、カナダ人のイニスがこのような危機感に言及していることの意味は、時代や国をこえて、つねに吟味されるべきである、と考える。

このイニスのテキストの構図を、セルト一の図式にあてはめてみるとどのようなことがいえるのか。「機械化された知識」は時間概念をもたない、つまり、動的でないところの、秩序的・科学的・合理的な「場所」のなかに収まってしまおう、といえるのか。反対に、無反省な知識そのものが力の源泉となって、「場所」という機構を作動させているといえるのか、という問題も考えてみなければならない。

大学は、国家の統治をになう人材の育成とともに、学問を考究する自由な空間でもあるはずだが、「機械化された知識」

を生産する場にもなりうる契機をはらんでいる。なぜならば、大学は、学科や学部という制度のもとに成り立っていかざるをえないからである。根源的には、科学そのものが自存するための条件として、みずからの知に依拠せざるをえない。イニスは箴言ふうに説く。「科学は、知識を配布するために用意される機構のうちのみならず、配布されるであろうなんらかの知識のうちでもおのれ自身の生を生きている（298頁）」。科学（＝学術）が生きる場所は、重層的である。ひとつは、大学や学会や学術メディアなどの「場所」（＝知識を配布するために用意される制度・機構）である。それと同時に、科学は、知識という「場所」においてはじめて存在するのである。しかし、その「場所」自身が構築されるための条件を反省することはないだろう。すなわち、ある特定の知識を生みだし、それによって、ある特定の科学を構造化したところの、「知識」自身を生み出した条件そのものを、反省的に吟味することはしない（それは哲学の問題とされてしまう）。かくて、セルト一のいう「場所」概念と、イニスがその暴力性を警戒する「機械化された知識」とが、いかに関連しているかをみることができる。「声の文化」と「文字の文化」との対比の見地からみれば、「機械化された知識」とは文字化された知識、すなわち、「文字の文化」の産物によって基礎づけられているのである。

イニスは、「批判的検討」のなかで、グラハム・ウォーラス（Graham Wallas）の興味深い所論<sup>11</sup>に言及している。ウォーラスは、「創造的な思考は口承に依存しており、そして口承によって好都合な諸条件は知識の機械化の増大とともに消失しつつある、と考えた」というくだりを引いている<sup>12</sup>。創造的な思考をはばむ「機械化された知識」は、口承（「声の文化」）と対立するものとして提示される。口承（「声の文化」）は、「創造的な思考」が生み出される栄養価の豊富な土壌であるとされる。「声の文化」は「創造的な思考」を生みだし、他方、「文字」は「機械化された知識や思考」を生み出す条件をととのえる。イニスおよびウォーラスは、「創造的な思考」が拠って立つ、「声の文化」にとって好都合な条件の消失が進行していることを危惧する。そのような事象（好都合な条件の消失）は、「機械化された知識・思考」が依拠する場所、つまり「文字の文化」のモメントが作動しているがゆえに起こっているものと解することができる。それでは、そのような「文字の文化」の力の根源はなんであろうか。「声の文化」にとって好都合な条件の消失させる、「文字の暴力性」とでもいうべきモメントがあるとすれば、それについて検討をくわえなければならない。

### 「文字の精霊」

文字の暴力性は、洋の東西を問わず見いだすことができ

る。ここで、中島敦の短編「文字禍」においてえがかれる「文字の霊」について考察をおこなう<sup>13</sup>。作品のなかで、人間は、「文字の精霊」によっていかに認識を狂わされているかについて述べられている。端的にいえば、「文字が普及して、人々の頭は、もはや働かなくなった<sup>14</sup>」のである。文字がなかった「声の文化」においては、「歓びも智慧もみんな直接に人間の中に入って来た<sup>15</sup>」のであり、「文字の文化」のなかにいるわれわれは、「文字の薄被をかぶった歓びの影と智慧の影<sup>16</sup>」しか知らないのである。「文字」は、実像に沿う影のようなものである。セルトーの「場所」において作動する「戦略」概念の描写のなかで、管理や分析をおこなうべき客体（対象）をうかびあがらせる機能が言及されていたことを思いおこそう。「おのれに固有のものとして境界線をひけるような一定の場所」こそが、「文字の文化」世界の領域である。つまり、このような「場所」概念のなかで、記述の対象としてものごとをひき入れることに成功するならば、分析的かつ客観的な記述が可能となってくるのだ。つまり、書くことによって（文字の使用によって）対象を支配し制御することができることを意味し、結果的に、合理的な思考の勝利を示唆しているかのようにみえる。しかし、事態はまったくその逆である。「この文字の精霊の力ほど恐ろしいものは無い。君やわれわれが、文字を使って書きものをしとるなどと思ったら大間違い。わしらこそ彼等文字の精霊にこき使われる下僕じゃ<sup>17</sup>」。

イニスのいう「機械化された知識」は、文字の精霊が顕在化したものとして解することができる。それは、創造のいとみなみとはほど遠いところにある。「境界線をひける一定の場所」のなかからの視点（近代的な合理性をまとった視座）の優位性はもろくも崩れ落ちるのである。われわれは、まさにフーコーのように、知の言説編制（「場所」）において<sup>18</sup>、網の目のように配置された「機械化された知識」の機構のなかで、思考のしかたや表現のしかたを、ある一定の方向に作動するモメントのなかで生きている。創造的な知の探究をしているはずの大学でさえも、「軍事力の一分科」として権力に奉仕することが、あたかも自然にみえてしまう状況に陥ってしまいかねないのである。そのような陥穽からぬけだす方法はないのであろうか。問題の本質が「文字禍」に象徴されるころにあるとしたら、文字の精霊に対抗することができるのは、いかなる力であろうか、といいかえることもできる。

### 「声」→「文字」、そしてふたたび「声」（への願望）

「声」（聴覚）および「文字」（視覚）それぞれが媒介する文化の潮流を、非常に大まかに区分するさいに、イニスとマクルーハンが共有する認識がある。それは、「声」から「文字」へ移行したあと、新しいメディア（テレビ）の出現とともに、「声」

の時代が到来してくる、という図式である。「声」から「文字」への移行は、二千年以上にわたって、いくつかの革命期（アルファベットの発明、プラトン哲学の誕生、音読から黙読への移行、グーテンベルクの活版印刷術の発明など）をへながら、現在なお進行中の変容である。イニスやマクルーハンの二十世紀半ばにおいて、電気（電子）メディアの出現の衝撃は、彼らをして、「声」から「文字」の先に到来するはずのすがたを、予言的に語ることを強くうながした（箴言を用いた動機はここにもみとめられる）。五世紀におよぶ期間をついやして完成度を高めた、印刷術による「文字の文化」は、あたかもその技術の精度の進展が臨界点にまで達したかのごとく、その勢いをもってあらたなメディアを生みだした、といえる。それによって、旧来の文化社会（政治・経済もふくめた実社会）に終止符を打つ微細な地鳴りの振動を、彼らは聴いたのであろう。それゆえ、イニスは、ギリシア文明のなかの多様な口誦の精神を回復することの重要性を説いているのである<sup>19</sup>、とおもわれる。

今や、テレビの出現から半世紀がたち、インターネットやモバイル端末の時代に入っている。はたして、「文字の文化」がすたれて「声の文化」が到来したのであろうか。かりにそれを証拠立てる事実が散見されたとしても、にわかに、「声」の時代に入ったのだとはいいたいがたい。われわれは、いまもなお、「声→文字」のベクトルのなかで生きている、と考えるからである。また、かりに、「文字」から「声」へのモメントが作動しているとしても、「声≠文字」というせめぎあいが、相当期間（数十年なのか数世紀なのかは不明であるが）つづくことになるはずであり、その革命的転回は、その渦中にいる者にとっては気づかれないものである。

ここで、イニスの方法の特徴を描出する。マクルーハンは、イニス著『メディアの文明史』の「序文」において、イニスの文体について端的につぎのように形容している。「イニスは、表向きは関連がなく、均衡を欠く文章や箴言をモザイク状に組み立てた構造のなかで彼の検討を提示している<sup>20</sup>」。この指摘は、マクルーハン自身の著作『グーテンベルクの銀河系』のなかにもそのまま当てはまるものである<sup>21</sup>。このような表現形式じたいは、たいへん興味深く、文体論というよりも思考方式そのものの論究につながるものであるが、本稿ではその重要性を指摘するにとどめるが、いずれ別稿で著したい<sup>22</sup>。

次に引用するテキストは、イニスの着眼のしかたそのものにかかわるものである。「彼は、『観点』からする研究から、化学インターフェイスのなかで呼ばれているような『界面』の方法によって洞察を生み出す研究へと、彼のやり方を変えた。『界面』は、一種の相互刺激のなかでの実体の相互作用をさし示している<sup>23</sup>」。さらに、本質をつく指摘が引用テキストにつづく。「芸術や詩においてはこれは、連結詞を用いずに並置していく並列法をもった

『象徴主義』の技法にほかならない。これは書かれた談話の形態であるよりも、むしろ会話ないし対話の自然な形態である。」ここに、われわれが十分に検討を深めるべきイニス洞察がみとめられる。それは、先に提示した「表向きは関連がなく均衡を欠く文章」を並置したり、モザイク状に提示してみせる思考スタイルと、会話や対話といったオラリティがむすびつけられている、という点である（「並置」の思考様式については、前注を参照のこと）。

マクルーハンの言及はつづく。「筆記においては、なんらかの事柄についてその一局面を分離し、そしてその局面に対し、不変の確固とした注意を向けるのがその傾向である（序文 iii）」。これは、「文字の文化」の本質をまさにかいたもので、セルトーのいう「場所」概念との親和性がきわめて高い。「場所」は、「おのれに固有のものとして境界線をひけるような一定の場所<sup>24</sup>」であり、周囲の環境から身をひきはなすことによって可能となるような「場所」のことである。「書くこと」は、このように、対象から身をひきはがして超越的な位置を確保することによって、その客体をながめることが可能となる視点を有することを必要とする。

「声の文化」は、「文字の文化」とは対極的なモメントを内包している。「対話においては、なんらかの事柄の多数の局面のあいだにそれらの自然な相互活動が存在する。諸局面のこの相互活動は洞察あるいは発見を生み出すことができる<sup>25</sup>」。なんらかの事柄を、ひとつの局面にのみ抽出しようとして、それを分析的な視座に立って視るとなると、「文字の文化」の特性であるとすれば、それとは対照的なはたらきを「声の文化」はになる。事柄にかんして複数の局面が存在することをみとめ、それらの局面どうしを並べ置き（まさに反応しあう界面をつくり）、自然な相互活動、すなわち、起こるべくして起こる化学反応によって、洞察・発見（＝反応後にあらたな分子構造をもった化合物）を生み出す。これこそが、「機械化された知識・思考」とは真逆の「創造的な思考」のすがたである。イニスは、ある固定的な観点（伝統的な視点）から事柄にアプローチするのではなく、事柄に内包するもろもろの要素（＝局面）をとりだして、それらを並置して反応し合うのを待つ。ここに、イニスの方法論の真髄を読み取ることができる。比喩的にいえば、「イニスが歴史を利用するという方法を、物理学者が、霧箱を利用する際に思いついた。未知の形態を既知の諸形態にぶっつけてはね返らせることによって、彼は新しいあるいはほとんど知られていなかった形態の本性を発見した<sup>26</sup>」のである。文字（書くこと）に慣れ、リテラシーを当然とみる現代のわれわれの文化社会において、「声」という局面を入れこむことによって（つまり、「声」と「文字」とを接触させる界面をもうけることによって）、その反応するさまを観察しようという立場にイニスは立っている。

## セルトーの「時間」概念

われわれは、セルトーが「場所／時間」と分節したさいの、それぞれの項が、イニスらが区分けする「文字／声」のそれぞれの項と、位相を同じくするか否かの検討をおこなっている。セルトーの、「時間」的な概念の特性についてふりかえてみたい。セルトーの「時間」的なものについて端的にいえば、それは「実践された場」であり、「もうひとつの生産」がおこなわれる次元である。それは、既存のものを、てこのように巧みに利用してつくりなおす（プリコラージュする）、つまり、支配的な制度や言説のなかで、一見したところ、支配されているかのような構図にありながらも、したたかにそれらをうまく利用するタイミング（好機）をはかろうとする実践、という特性をもった領域概念であった。そのような実践者は、固有の場（戦うた

チャンスめの固有の基地や戦略）をもたず、獲物をねらう、つねに時機をうかがっている密猟師のような存在であった。では、そのような密猟と「声の文化」とはいかなるむすびつきがあるのか。

その共通項は「時」である、とみてる。制度や秩序や計画は、文字であらわすことができ、また眼で見て分る視覚的なイメージに置きかえることができる。そこには、「時のながれ」というものがなく、うごきのない静止画のようなものである。それにたいして、好機をうかがい逆転を企図する者は、「時間」に大きく依存している。「時機が来るのを待つ」姿勢のごとく、

とき「瞬間」に賭けているのである。たとえば、牢獄にとらわれた者が、刑務所という建物や刑罰制度という「固有の場」のなかで、処置された無力の囚人であり、彼がなんらかの方法で物理的にそこから抜け出るためには、「時が来るのを待つ」（恩赦による解放や監視の目を盗んで脱獄する隙をうかがうなど）というように、「時」が唯一の資源であり、それに依拠するしかほかはない。

それでは、セルトーのこのような「時間」概念と「声の文化」とは、いかなるむすびつきをもちうるのか。「声の文化」の特性としてあげられるものは、ホメロスの口誦詩の文体や構成にみられる。ミルマン・パリー<sup>27</sup>や、アルバート・ロードの仕事<sup>28</sup>をうけて、エリック・A・ハヴロックは、パリーとロードの研究をもとに、ギリシア哲学の開始が「声」から「文字」への構造変化といかに連関しているかを論じている<sup>29</sup>。ヴァルター・J・オングは、『声の文化と文字の文化』（1991）のなかで、エリック・A・ハヴロックの仕事をつぎのように紹介している。「パリーとロードが、口承の叙事詩物語の声にもとづく性格に関して発見したものを、ハヴロックはその『プラトン序説』で、古代ギリシアの声の文化全体に拡張し、書くことがもたらした思考の構造変化とギリシア哲学の開始とがいかにたがいに緊密に結びついていたか、ということ説得的なしかたで明らかにし

た<sup>30</sup>。ハヴロックは、プラトンによる哲学の創出が、「声」から「文字」にむかう巨大なモメントのなかで生じたものであるとみている。「プラトンがかれの『国家』から詩人を排除したことは、ホメロスのなかにくりかえしあらわれていた素朴で累積的、並列的な、声の文化にもとづくスタイルの思考を、プラトンがしりぞけたということである。かわりにプラトンが支持したのは、世界と思考そのもののするどい分析ないし解剖であり、そうしたことは、ギリシア人のところにアルファベットが内面化されることによって可能になったのだった<sup>31</sup>」。ここで検討されているのは、ホメロスの口誦詩を代表とする、「声の文化」の特徴と、「声の文化」がアルファベットの使用の内面化によって、「文字の文化」（プラトン哲学）が生まれる潮流とその機構（『国家』における詩人の追放に象徴される「声の文化」の断罪）であった。口誦の文化にみいだされる特性は、きまり文句や韻律の使用であり、それらは口誦による記憶のメカニズムをささえていた。詩人は即興的に詩を吟ずることができたのは、まさに「声の文化」が有する時間性（瞬時に口にすべき表現をみいだすという意味での時間依存）のゆえである。また、ヴァルター・J・オングは、「声の文化」の生活様式において、ものを買うことさえ、「声としてのことばの闘技性における一つの作戦行動<sup>32</sup>」であり、機知の応酬であった。そこには、「時間」「動き」の相がみいだされる。「一次的な声の文化においては、商売でさえたんなる商売ではない。それは、根本的にレトリックなのである<sup>33</sup>」。セルトーの「場所／時間」の図式における後者の項である、「時間」の次元において作動するのは、「場所」を統御する戦略ではなく戦術であった。その戦術の典型的なものひとつとして「レトリック」があげられていたことも付言しておきたい<sup>34</sup>。

「文字」による筆記文化によって構築された「場所」は強力な磁場のような空間であり、そのなかに入った人びとの思考をある特定の方向にむけてしまう力を有する（いわゆる、常識や慣習といったものにしがう力を有する）。そのような表象作用をうながす目に見えない構造体は、科学や社会制度のパラダイムとしてあらわれ、実体的な産物や可視的な仕組みとして顕現化される。それは、ある特有の文化、さらには文明という呼び名がつけられて実体化する。イニスは、「知識の独占ないし寡占は均衡が乱されるくらいにまで築き上げられる<sup>35</sup>」ことを示そうとしている。知のディスクールが独占され、言説空間の支配が臨界点にまで達すると、そこでそれまで保っていた秩序のバランスが一気に崩れ去る、という洞察である。文明は高度なものになればなるほど、その崩壊の契機を内側において準備をはじめるのである。その際に、新しく登場したメディアが大きく関与する、というのがイニスのみたてである。「ミネルヴァの梟は、たそがれがやってくるとはじめて飛びはじめる<sup>36</sup>」。そうであるならば、プラトン哲学（「文字の文化」）の出現は、ホメ

ロスの口誦詩の「声の文化」の独占的發展のなかで準備されていたのである。同じように、印刷術による「文字の文化」の発展は、その崩壊の契機を内包し、あらたな「文化」の生成というミネルヴァの梟が飛び立つのであろうか。

### まとめ

マーシャル・マクルーハンは、『グーテンベルクの銀河系』のなかで表現したように、印刷メディアが近代的世界観（「文字の文化」や「場所」概念からみる視点）を構築してきたのに対し、果たして、テレビなどの電気（電子）メディアの登場は、「声（口誦・口承）の文化」を回復させつつあったのであろうか。いまや、二十一世紀、インターネットやモバイル端末の時代である。携帯電話の無料通話サービスの普及によって、新しいメディアによる「声」の出番が多くなる条件はつくられつつあるが、他方では、スマートフォンは、フォン（phone）というよりも、むしろ、その画面を視る（あるいは、なぞる）ことをよりいっそううながしているようにみえる。聴覚よりも視覚の肥大化がおこっているのではないか。

「声」から「文字」へのうごき、その文字においても、手写本から印刷本というように、新しいメディアの登場によって、コミュニケーションの様式が変わり、それとともに社会の様相も変容してきたのを、われわれは歴史的にみている。マクルーハンは、電子メディアの登場によって、「声の文化」の復活を示唆（あるいは、イニスもそうであったように、「声の文化」への復活を強く願望）したが、いま、あらたな装い（メディア）のもとで、「声」ではなく、「文字」の文化、つまり、あらたな視覚中心の文化が再編されているかのようでもある。われわれは、この小論のなかで、ミシェル・セルトーが提出した図式、「場所／時間」の分節を、「文字／声」の対比によって探究しようところみてきた。それには、ハロルド・A・イニスが提示した、コミュニケーション・メディア史からの参照のたすけをかりた。本稿では、とくに、「場所」概念と「文字の文化」の位相の親近性について論じることから始め、つぎに、「文字」と「声」との対比、さらには、「声」と「時間」との連関性について検討してきた。目的は「場所／時間」＝「文字／声」の等式の成否を検討することであった。その方法は、あたかも、イニスのいう「界面」の方法、すなわち、ことなつたジャンルのものを並置するというやりかたを倣ったかのような展開（「場所」—「文字」—「声」—「時間」）に依った。しかし、このような論考を書くということは、「声」によってではなく、論文（「文字」）のかたちで語らざるをえない矛盾をはらんでいる行為である、ということをつねに反省的にとらえるべきであらう。

## 注

<sup>1</sup> マクルーハン、1987、7-22 頁。

<sup>2</sup> 十五世紀半ばのルネサンスから十八世紀末のフランスの大革命前夜までのあいだに「書物」がおよぼした作用については、リュシアン・フェーヴル&アンリ＝ジャン・マルタン（1985）を参照。以下、物質としての書物などが人間の精神活動にあたる研究のいくつかを紹介しておく。グーテンベルク博物館長であった、ヘルムート・プレッサーは、書籍学者として書物の誕生の環境を論じている（1973）。エリック・ド・グロリエ（1992）は、書物が伝える思想内容とは独立したものと、外形的な「書物」そのものを、技術的・社会的・経済学的・心理学的などの側面から研究していく視点を示し、書物学を提唱した。ロジェ・シャルチエ（1996）は、手写本から活字本に移り変わるなかで、テキスト・書物・読書行為の三者のモメントを、フランスにおける読書共同体の成立や作者の誕生という視点から論じている。エリザベス・L・アイゼンシュタイン（1987）は、印刷技術がそのリテラシーを高めたことに影響しただけではなく、人びとの認識のあり方や精神活動そのものを変えてしまったと論じている。ウィリアム・アイヴィンス（1984）は、近代社会の成立、つまり、自然科学的かつ機械的知識によって構築された社会の成立において、印刷画、とくに版画という新しいメディアが果たした機能についての論考をおこなっている。書物は必ずしも事柄を書き留めておくだけに役立つだけではない。メアリ・カラザース（1997）は、トマス・アクイナスの並外れた記憶力について描出し、「記録」のためではなく、「記憶」のための道具としての書物にかんする論考をこころみている。

<sup>3</sup> 拙稿（中西、2014）による報告によれば、「読むという行為」が記号のシステムとして、硬直性をおびた「場所」を、流動的で創造的な「時間」の次元に変容させる契機になりうることを指摘した（とくに、メトニミーの潜在的な力を論じた）。

<sup>4</sup> イヴァン・イリイチ（1995）は、十五世紀の印刷術発明に先立つ、十二世紀に起きた書物の読み方の変化、つまり、音読から黙読への変容の意味を論究した。

<sup>5</sup> セルトー、1987、242 頁。

<sup>6</sup> セルトーは、「戦略」概念に「戦術」概念を対置し、<場所—戦略>とは、まったくことなる位相にあるものとして、<時間—戦術>を提示する（セルトー、1987、25-28 頁）。

<sup>7</sup> セルトー、1987、25 頁。

<sup>8</sup> セルトー、25-26 頁。

<sup>9</sup> 「批判的検討」の註（1）を参照（p. 303）。

<sup>10</sup> 『啓蒙の弁証法』において、ホルクハイマー&アドルノ（1990）は、いわゆる「啓蒙」が進展するにつれて、機械化された「知」が、ある種の硬直化した思考の様式を生みだし、それが全体主義の思想につながっていったことを示唆している。つまり、太古からの「野蛮」なるものを克服するためのいとなみによって、結果として、新たな啓蒙化された合理性という知の「野蛮」を産出している、とみている。

<sup>11</sup> G. Wallas, *Social Judgement*, London, 1934.

<sup>12</sup> イニス、1987、297 頁。

<sup>13</sup> 土田（2013）は、美学イデオロギーの暴力性を暴こうとするポール・ド・マンと、「文字の霊」の暴力性を描出する中島敦との共通性について言及している。

<sup>14</sup> 中島、2008、195 頁。

<sup>15</sup> 同書、195 頁。

<sup>16</sup> 同書、195 頁。

<sup>17</sup> 同書、195 頁。

<sup>18</sup> ジョナサン・クレーリー（1997）は、ミシェル・フーコー

（1981）の「切断」概念に依拠し、視覚文化の根本に迫る「観察者」の誕生を論じている。

<sup>19</sup> 『メディアの文明史』（イニス、1987）「批判的検討」を参照。そのような志向性は、二十世紀半ばにおける新しいメディアの出現（テレビなど）をみるにあたり、これまで文字によって支配されてきた文明のゆがみを感じとっていたことに根ざしている、と考えられる。

<sup>20</sup> 『メディアの文明史』序文（マクルーハン著 1987）i。

<sup>21</sup> のちのM・マクルーハン著『メディア論』は、それとは反対に「表向きうえで関係がある」ような、項目配置を意識的におこなっているようである。

<sup>22</sup> ここでいう「思考方式の論究」とは、スーザン・A・ハンデルマン（1987）による、ヘブライ的思考様式と、ギリシア・キリスト教的な発想様式との対比への言及にもとづくものである。前者の思考様式は、出来事やさまざまな考えを並置する傾向をさし、それがすぐれて隣接関係にもとづきメトニミー的である、と指摘されている。

<sup>23</sup> 『メディアの文明史』序文 ii-iii 参照。このような「界面」という比喩（化学用語を用いた比喩）を使用するにあたり、英文学者ではあるが、学部教育において、機械工学（理系）を学んだマクルーハンのアカデミック・バックグラウンドから生まれた独特の表現であると思われる。イニス自身もまた、経済史を基盤としたメディア論を構想しようとするにあたり、学際的な思考様式が作動しているものと思われる。

<sup>24</sup> セルトー、1987、25 頁。

<sup>25</sup> 『メディアの文明史』序文 iii。

<sup>26</sup> 同書、vi。

<sup>27</sup> ミルマン・パリーの息子アダム・パリー（Adam Parry 1987）によって編まれた。ホメロスの作品を口誦詩特有の文体と構成からなるものとしてみなし、叙事詩の記憶等が朗誦に利するという視点を提示した。

<sup>28</sup> 定型句と韻律にかんするM・パリーの口誦詩論をユーゴスラヴィアでのフィールドワークによって実証した。Lord（1960）。

<sup>29</sup> 詳しくは、ハヴロック著『プラトン序説』（1997）を参照。マクルーハンとは、ハロルド・A・イニスの『メディアの文明史』の序文のなかで、ハヴロックの仕事に言及し「イニスの元同僚であったE・A・ハヴロックは最近、ギリシアの古い口承文化の破壊と新しい筆記文化に対して全研究を捧げている。彼の『プラトン研究序説』（Preface to Plato, Harvard, 1963）はイニスを歓喜させたことであろうし、またイニスのなかにはこのような十全な研究の主題となるべきひじょうに多くの文章が存在する（iv）」と述べている。

<sup>30</sup> オング、1991、65 頁。

<sup>31</sup> 同書、65 頁。

<sup>32</sup> 同書、146 頁。

<sup>33</sup> 同書、146 頁。

<sup>34</sup> セルトー、1987、27 頁。

<sup>35</sup> 「ミネルヴァの梟」（イニス、1987）1 頁。

<sup>36</sup> 同論文 1 頁参照。「ヘーゲルは、ギリシア文明の衰退と没落を経験した時代の主要な古典的著作のなかで達成された文化の結晶化に関してこのように書いていた。ギリシア文化の豊かさ、その独自性、その西洋史への影響、これらは、飛翔がギリシア文明の黄昏へ向けて始まっただけではなく、西洋文明へ向けても始まったのだということを示唆している（1 頁）。」

## 参考文献

- アイヴィンス、W. (1984) 白石和世訳『ヴィジュアル・コミュニケーションの歴史』晶文社。
- アイゼンステイン、E. L. (1987) 別宮貞徳監訳『印刷革命』みすず書房。
- イニス、H. A. (1987=1951) 久保秀幹訳「ミネルヴァの鼻」『メディアの文明史 コミュニケーションの傾向性とその循環』1-44 頁、新曜社。
- イニス、H. A. (1987=1951) 久保秀幹訳『批判的検討』『メディアの文明史 コミュニケーションの傾向性とその循環』295-304 頁、新曜社。
- イリイチ、I. (1995) 岡部佳世訳『テキストのぶどう畑で』法政大学出版局。
- オング、W. J. (1991) 桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』藤原書店。
- カラザース、M. (1997) 別宮貞徳監訳『記憶術と書物 —中世ヨーロッパの情報文化』工作社。
- クレーリー、J. (2005) 遠藤知巳訳『観察者の系譜 視覚空間の変容とモダニティ』以文社。
- グロリエ、E. de. (1992) 大塚幸男訳『書物の歴史』白水社。
- シャルチエ、R. (1996) 『書物の秩序』筑摩書房。
- セルトー、M. (1987) 『日常実践のポイエティック』山田登世子訳、国文社。
- 土田知則 (2013) 「ポール・ド・マンと『物質性』に関する二つの解釈系列」『思想』no.1071、2013年7月、210-224 頁、岩波書店。
- 中島敦 (2008) 『中島敦』筑摩書房。
- 中西満貴典 (2014) 「レトリック批評におけるメトニミーの可能性 —ミシェル・ド・セルトーとポール・ド・マンを読む—」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第 63 輯、1-8 頁。
- ハヴロック、E. A. (1997) 村岡晋一訳『プラトン序説』新書館。
- ハンデルマン、S. A. (1987) 『誰がモーセを殺したか 現代文学理論におけるラビ的解釈の出現』山形和美訳、法政大学出版局。
- フェーヴル、L. & マルタン、H. (1985) 関根素子他訳『書物の出現』上、下、筑摩書房。
- フーコー、M. (1981) 中村雄二郎訳『知の考古学』河出書房新社。
- プレッサー、H. (1973) 響田収訳『書物の本』法政大学出版局。
- ホルクハイマー、M. & アドルノ、T. W. (1990) 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店。
- マクルーハン、M. (1987=1951) 久保秀幹訳「序文」H. A. イニス著『メディアの文明史 コミュニケーションの傾向性とその循環』i-xvii 頁、新曜社。
- マクルーハン、M. (1986) 森常治訳『ゲーテンベルクの銀河系』みすず書房。
- マクルーハン、M. (1987) 栗原裕・河本仲聖訳『メディア論』みすず書房。
- Innis, H.A. *The Bias of Communication*, Second Edition (Toronto: University of Toronto Press, 2008, First Edition, 1951).
- Lord, A. *The Singer of Tales* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1960).
- Parry, M. ed. *The Making of Homeric Verse: The Collected Papers of Milman Parry* (New York: Oxford University Press, 1987).
- Wallas, G. *Social Judgment* (London: G. Allen & Unwin, 1934).

(提出日 平成 27 年 1 月 9 日)